

「奥能登国際芸術祭2017」が開催されている珠洲市狼煙町の「禄剛崎灯台」。歴史的価値があり「日本の灯台50選」に入っている



蛸島地区の秋祭り



「道の駅塩田村」。珠洲市は古くから塩づくりが盛んだった



塩田千春「時を運ぶ船」(旧清水保育所)

ひびのこづえ「スズカ」(旧飯塚保育所)

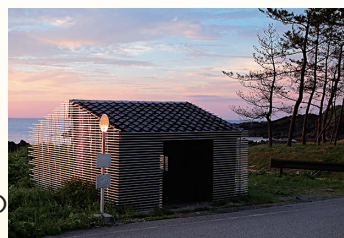


河口龍夫「小さなわすれもの美術館」(旧飯田駅)

文・ジャーナリスト、平野幸夫(ひらの・ゆきお)。元毎日新聞論説委員、日本ペンクラブ会員。毎日放送ラジオのニュース番組コメンテーターを務め、2005年から関西学院大学で「現代ジャーナリズム論」「日本語文章表現」の授業を持つ。毎日新聞北陸総局長も歴任。著作に「サライニ泊三日の旅」「金沢」(小学館)などがある。



アレキサンドル・コンスタンチーノフ(ロシア)
「珠洲海道五十三次」(大谷～正院地区)



忘却の美、奥能登国際芸術祭

黄金色に輝く棚田の稲穂が波のように果てしなく続き、青い海に映える。作詞家・阿久悠は自身が作詞した「能登半島」で、豊穡な実りに恵まれるこの季節の美しさを讃え「夏から秋への能登半島」とつづった。3年余の金沢在住時、よく半島を下ライブ、この曲を口ずさんだ。

今秋は初めて「奥能登国際芸術祭2017」が半島突端近くの珠洲市を中心に、10月22日まで開かれている。テーマは「最涯(さいはて)の芸術祭」。アートの島々にその印象を変えた3年に1度の「瀬戸内国際芸術祭」を参考にした。期間中約3万人の集客を目指す。故郷の成功イベントが新たな地域の活性化策として生かされ、喜ばしい。今回も過疎を逆手にとり、廃線の駅や閉館した映画館など約40カ所が展示の舞台だ。「忘却の日本」を新感覚で表現したドイツ、韓国などの気鋭のアーティストらの作品群は新鮮な驚きを与える。鑑賞パスポート2500円。美術ファンに人気の「金沢21世紀美術館」でも連動、相互割引もある。「芸術の秋」に、お薦めしたい。

(写真提供：同芸術祭実行委員会。TEL0768-82-7720)